千葉県旭市足洗出土の有角石器について

蜂　屋　孝　之

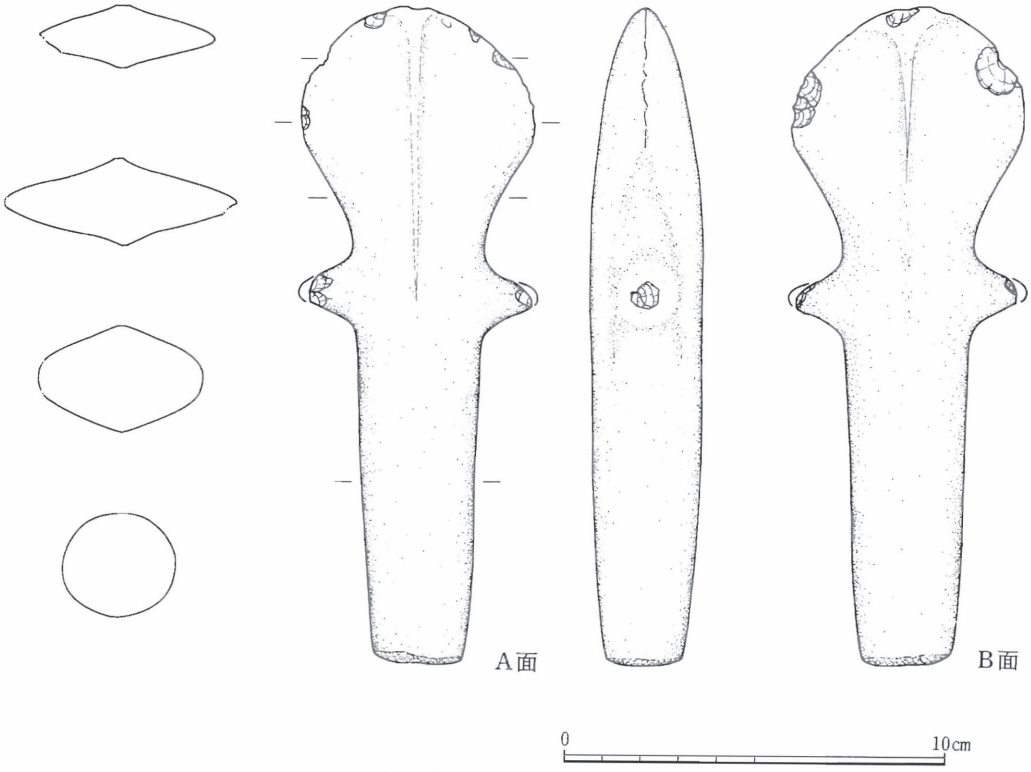
1．はじめに

ここ十年ほどの間に千葉県内で出土した有角石器は着実に増加している。最近の発掘調査による出土報告例を含めれば26例ほどになるだろう（註1）。現在もっとも出土例が多く有角石器の中心的な地域と言われている茨城県の出土数に近づきつつある。特に千葉県は他県の資料に比して発掘調査による出土例が多く、有角石器の時期や出土状況、遺構との関連性などが詳しく検討できるようにもなってきた。

ここに取り上げる千葉県旭市足洗出土の有角石器は、研究史的につとに知られている個体である。かつて柴田常恵によって1911年（明治44年）に紹介され、その後における有角石器研究のはしりとなったものであり、その形態的特徴から研究史上重要な位置を占めてきた個体であると言える。単独で採集されたものであることからその所属時期等の詳細は不明だが、今回この有角石器の所有者である成田市在住の大野氏に実測の機会を与えていただいたことから、この有角石器の検証と研究史的経緯などについてみていきたいと思う。

2．足洗出土の有角石器

所有者の大野氏によれば、氏の祖祖父にあたる大野市平氏みずからが旭市足洗で採取したものであるという。現在は西足洗・東足洗の二地区に分かれている。千葉県の埋蔵文化財分布地図(註2)によれば、この有角石器が出土した遺跡は、旭市西足洗の台ノ前遺跡となっている。史料的にははっきりした出土場所の裏付けはないのではないか



第1図　足洗出土有角石器（1/2）

と思われる。この遺跡は、九十九里海岸から1.5kmほど入った海岸線に沿って発達した砂堤帯上にある。西足洗・東足洗の地区には海岸線の後退に伴って発達した砂堤帯上に縄文時代以降の遺跡が分布している。分布地図に記された台ノ前遺跡の時期は弥生及び奈良・平安時代となっているが発掘調査などが行われていないことから詳しい遺跡の内容はよくわからない。しかし、弥生時代の遺跡が存在しても決しておかしくはない。ただ台ノ前遺跡出土と特定し得るのかは疑問である。この周辺地域の遺跡の実態は、今後の発掘調査に待たねばならないであろう。

第1図が出土した有角石器である。角部の両先端をわずかに欠損しているにすぎない。全長17.4cm、刃部最大巾6.2cm、残存する角部間5.9cm、刃部と角部の間にあたる部分の最小巾3.5cm、柄部の中央で3.0cm、最大厚3.0cmを測る。刃部の形態は、先端がやや突出した丸みの強い形態で、刃面は最大巾よりもやや角部に近い所までつくり出されているが研磨の状態は鈍く鋭利ではない。刃部から角部に移る部分は急に横巾を狭める。角部の突出は極端に大きくはなく、完存しても刃部最大巾とほぼ同じくらいではないかと思われる。柄部はやや長く感じられる。両角部の先端が若干欠損するほか刃部にわずかな剝離がある。剝離面は古い段階のものと考えられるが、B面の刃部左側に見られる剝離は他の欠損面の状態よりは新しい様である。刃部の剝離のうち両面の中央先端に見られるわずかな剝離は再研磨されやや不明瞭な剝離面となっている。全体的によく研磨されており、側縁にも敲打痕等の痕跡を残していない。ただ柄部末端にのみ敲打痕が残っており、整形のために行った敲打の後この部分だけは充分な研磨を行わなかったようである。両面の中軸線上には明瞭な稜がある。A面は刃部先端の左右からはじまる稜線がしだいに収束しその間は2㎜ほどの平坦面を伴いながら角部にいたる。B面は刃部先端の左右からはじまる稜線がはやめに収束し、A面に比べれば平坦な稜は少ないものの明瞭な稜線が角部まで達する。断面形を4カ所で示してみたが、これを見るとA・B面にみられる稜は、左右からの単純な研磨による鎬ではなく、中軸線の左右を丁寧に研磨し左右からせりあがるような鎬を形成していることがわかる。このような断面形の有角石器は今のところ県外の資料を含めても見当たらないと言ってよく、特異な形態であると言える。

3．足洗出土例の研究史的位置

次はこの足洗出土の有角石器が研究史上どのように扱われてきたのかをみていきたい。有角石器の詳しい研究史については関俊彦がまとめているので、ここでは足洗出土例に直接かかわるものに限ってふれていきたい（註3）。

この個体は1911年、柴田常恵によって「奇形石器」としてとりあげられたのが始めである（註4）。言うまでもなく研究史上にのぼった有角石器の初例である。大野市平によって東京帝国大学の人類学教室にもちこまれたこの石器について柴田は次のように述べている。「鉾形を呈する磨製品で、製作状態は刃部が先端に限られ、柄部は円形でひもかけ用と思われる形の突起を左右に造り出し、鋒を有していることなど純然たる石器時代の人々の製作品とするには不似合いの感があり、中国上代の銅製品と何らかの交渉があったと認められる」としている。

人類学教室に集まった研究者らは次のように意見を述べている。

大野雲外　この石器には鋒があり、左右に突起を作り出しているのは金属製品をまねたもので石器時代人が作ったものではない。最近になって不動尊が手にしている剣などに似せて作られたものである。

坪井正五郎　石器時代の遺物とは思われない。古墳時代関係の遺物と見なすべきか。

松村　瞭　古墳時代の遺物とは判断できないが、日本人が作ったものであろう。少なくとも石器時代の遺物ではない。

鳥居龍蔵　石器時代人や日本人によるものかは別にして、中国と関連したものであろう。

石田収蔵　他に発見例がないというだけで石器時代の遺物ではないとはいえない。青龍刀形石器とは形態が異なるが、製作技法は類似しており、同時代とみてよいであろう。

八木奘三郎　この石器に鋒があるのは奇異な感じだが、武蔵で発見された独鈷石にも鋒をもつものがあり、石器時代の遺物でないとは言えない。

安藤正楽　石器時代の遺物の中には独鈷石、青龍刀形石器、磨製石斧などがあり、この石器も同

時代のものとしてよいであろう。この石器に名前をつけるとしたらインド式とでもいえようか。

江見忠功　石斧の一種であろう。石器時代の遺物とみている。

以上のような多様な考えが出されているが、すでに数人が注目している稜の特徴は現在においても異彩を放つものであると言えよう。この紹介以後しばらくは出土例がなかったらしく関連する論考はあらわれない。

13年後の1924年、中谷治宇二郎によってようやくこの石器に名前がつけられ、いくつかの出土例をあげて分類が行われた(註5)。中谷はこの中で「有角石斧」という名称をはじめて使い、足洗例を「完全で顕著な鎬がある。角状の突起は小さい。」としている。また形態的な変化について、「頭部馬蹄形で突起が小さいものが、次第に頭部が撥形で突起が長くなり、再び依然の形に戻って鎬を伴うものに変化する状態が、石器時代から金石併用期に至る過程を示している」とし、足洗例を後出的な個体とみている。

1930年には森本六爾が有角石器についての意欲的な論考を行っている(註6)。この中で足洗例は写真で紹介されており、有角石器を石剣の一形式に属するものとし「有角式石剣」という名称を与えている。また足洗例を刃部馬蹄形で突起が小さく剣鉾の形に近いA様式に分類し、刃部撥形で棘状突起が不自然に長くなったB様式よりも古い形式であるとしている。

ややおいて1954年の伊東信雄の論考においても足洗例が写真で示され、「II式　刃部が円味をおびて飯箆状をなすもの」に分類されている（註7)。伊東は「鎬のある有角石斧は森本氏の考えられたように古い型式ではなく、第二次的な変化をした新しい型式か、或いは一般有角石斧とは別系統のものと見るべきである」としている。同年伊東のすぐ後に出された清水潤三の論考では「第III類　刃の機能不十分と認められるもの」に分類され、「刃としての機能は寧ろ衰えたものと認めてよい」として後出的な見方をしている(註8)。なお、清水は足洗例が九十九里海岸に近い低地から出土したことに疑問をもっていたため、柴田常恵に尋ねたところ（出土地の）確証がないことが明らかになったことを付記している（註9)。

1975年の新田栄治の論考では「IV類　刃先中央の突出が大きく刃部に稜をもつ」に分類されており、稜の有無によって有角石器が概ね二種に分けられ、稜のあるものが後出的であるとしている(註10)。1980年の同氏の論考では「第IV類　刃部は馬蹄形をなす。刃部先端がやや突出するものである。刃部中央に鎬をもつ」ものに分類されている（註11)。

1987年の石野田誠の論考では「B類（馬蹄形）刃部が馬蹄状にやや広がり、鎬状の稜をもつ」ものに分類されている(註12)。石野田はB類を古い段階のものと考えており、鎬状の稜がしだいに消滅していく過程を想定しているようである。

以上、足洗例が研究史上どのように扱われてきたのかを概観してみた。大まかにみれば、足洗例のような鎬または稜を伴う有角石器の位置づけ、すなわち古いのか新しいのかあるいは途中から現れるのかは意見の一致をみておらず、平面形態による分類に未だ終始していることはいなめない。

4．おわりに

これまで見てきたように、足洗例は形態的に特異であることから必然的に一類型として抽出されてきた。しかし、今までに諸氏によって行われてきた分類は、有角石器の個体差にもよると考えられるが、研究初期においては個体数が少なく一個体一分類に近く、戦後の研究では新田の7分類(註13)、石野田の9分類（註14）などがあり、個体偏差をなんとか取り込むために煩瑣な分類が行われてきたきらいがある。また、出土例の中で帰属時期が明確な有角石器も依然少ないことから、石野田らの分類による編年が直接時期の明確な有角石器によって検証され得る状況に今はない。以前拙稿で有角石器の個体差が本来時期的な違いを示しているのではないと述べたことがあり、編年作業をまったく放棄してしまったかのごとき誤解を招いたように思われる(註15)。この私見については、訂正したいと考えている。すなわち有角石器の形態的な個体差にとらわれすぎて羅列的な編年作業を行ってきたことに対しての批判的な見方であって、個人的には編年作業をまったく放棄してしまったつもりはない。平面形態を基準とした分類、特に刃部形態による分類に加え、足洗例の個体観察で強調した断面形態の特徴などが今後有角石器を分類するうえで重要な指標になってくるのでは

ないかと思う。この問題に関しては別稿を用意しており、そちらにゆずることにしたい。

最後に有角石器の名称について若干ふれておきたい。研究史上、「有角石斧」、「有角式石剣」、「有角石器」などの名称で呼ばれてきた。拙稿で有角石斧という名称を使用したことがあるが本稿以後は有角石器の名称を使用する。その理由として拙稿の中で述べたが、同時期の大陸系磨製石器のような定型的な生産加工用具がある中で、刃部の形態が不安定な有角石器が生産加工用具と考えられる余地はなく、「石斧」としての機能を有角石器に認めることができないからである。今のところ有角石器と言う名称が妥当であろうと考える。しかし、有角石器をいわゆる武器形石器の一つとして考えるという前提に立てば、将来的に有角石器発生の原型となる遺物の系譜が明らかにされるようになれば、その原型に関連した新たな名称が必要となることも考えられる。

岡本孝之は有角石器について最初の発見地の名に因んで「足洗型石器」を提唱している（註16）。この「足洗型」という用語は、ある種の石器群の中に認められるいくつかの類型のひとつであるような誤解を招く恐れがあり、適当でないように思われる。

以上、足洗出土の有角石器を介していくつかの点についてふれてみた。東京帝国大学にこの有角石器が持ち込まれた当時から個体数はすでに80例（註17）におよんでいる。しかし、どれほどのことが明らかになったであろか。この石器を前にして交わされた会話にあがった稜（鋒）の出自などは依然解決されていない問題であり、これ以外にも残された課題は多い。少しでも解決できればと思う。

最後に、本例の実測を快諾していただいた大野氏に記してお礼申し上げます。

註

1　宮城孝之（「有角石器の新例と若干の考察」1985年『研究連絡誌』13号（財）千葉県文化財センター）の集成21例に加え、四街道市物井出土1例（渡辺政治「物井出土の有角石器について」1989年『研究連絡誌』25号（財）千葉県文化財センター）、市原市草刈六之台遺跡で2例（『千原台ニュータウンⅣ－草刈六之台遺跡－』1994年（財）千葉県文化財センター）、同市草刈遺跡M区で1例（（財）千葉県文化財センターが1995年度発掘調査、未報告）、成田市南羽鳥タダメキ第2遺跡で1例（『財団法人印旛郡市文化財センター年報8』1992年（財）印旛郡市文化財センター）が最近の出土例として加わり千葉県内出土例は26例になる。ただ、古い出土例については、現在所在が確認できないものもある。

2　『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)』1986年（財）千葉県文化財センター

3　関俊彦「有角石器の所属時期と用途」1986年『論争・学説　日本の考古学』4巻

4　柴田常恵「下総国海上郡足洗村発見の奇形石器」1911年『人類学雑誌』27巻5号

5　中谷治宇二郎「東京人類学倉庫より発見されし二個の石器について」1924年『人類学雑誌』29巻7・8・9合併号

6　森本六爾「関東有角石器の考古学的位置」1930年『考古学』1巻1号

7　伊東信雄「東亜出土の有角斧」1954年『古代学』2巻2号

8　清水潤三「有角石器の諸問題」1954年『考古学雑誌』40巻2号

9　本文中で記したように、九十九里浜沿岸の砂堤帯には縄文時代以降の遺跡があり、足洗例の出土地については低地帯であっても有角石器が出土してもおかしくはない。

10　新田英治「有角石斧の再検討」1975年『考古学雑誌』60巻4号

11　新田英治「東日本の武器形石製品」1980年『鹿児島大学教養部史学科報告』29

12　石野田誠「茨城県勝田市西原出土の有角石器」1987年『明治大学考古学博物館館報』3

13　新田は註10の文献で8分類に分けているが、註11の文献で7分類に改めている。

14　註12に同じ

15　宮城孝之「有角石斧の新例と若干の考察」1985年『研究連絡誌』13（財）千葉県文化財センター

16　岡本孝之「足洗型石器覚書」1995年『神奈川考古』31神奈川考古学同人会

17　註16の文献による。